

# 京都女子大学図書館所蔵『紫明抄』残卷（下）

中 前 正 志  
柴 田 清 子

本稿は、中前・柴田「京都女子大学図書館所蔵『紫明抄』残卷（上）」（本誌第十一号所載、二〇一二年三月三十一日発行、以下、「前稿」）に続くものである。前稿では、鎌倉末期頃写と見られる京都女子大学図書館所蔵伝為世筆『紫明抄』残卷（913・364/S031）の前半部・第1行〜第202行（全十六紙継がれたうちの第1紙〜第7紙の部分）の翻刻を掲げ、その箇所についての京都大学文学部蔵本（京大本）・内閣文庫蔵十冊本（内甲本）・同文庫蔵三冊本（内丙本）との校異を示した。本稿では、それを承けて、同残卷の後半部・第203行〜第456行（全十六紙のうちの第8紙〜第16紙の部分。第13・14紙間と第14・15紙間に各々断絶あり。前者に若菜下巻の前半中二紙分ほど、後者に若菜下巻後半〜横笛卷冒頭部の十紙分ほどが、本来存在していたはず）の翻刻と、その箇所についての前稿同様の校異とを、掲載する。それに先立って、前稿に付した解題部分について、いくつか補訂を加えておきたい。

まず、前稿では、縦界があつて、全体の行数が「四五七行」であると記したが、実際は「四五六行」であつた。それに伴い、前稿に示した各行数を、次の通り訂正する。

前稿 P 72 L 1	全四五七行	↓	全四五六行
L 6	第 397 行	↓	第 396 行
L 11	第 398 行〜第 457 行	↓	第 397 行〜第 456 行
L 14	440・441 行	↓	439・440 行
P 74 L 15	全四五七行	↓	全四五六行
L 16	第 424 行〜第 452 行	↓	第 423 行〜第 451 行
P 76 L 11	第 404 行	↓	第 403 行
P 79 L 17	全四五七行	↓	全四五六行

また、今回翻刻したうち第 296 行の「幼 驚駭（マ）日本紀」（『源氏物語』若菜上巻「いはけたる」の注釈箇所）と対応する他伝本の本文を、前稿 P 76 L 15・16 に引載したが、一部不正確な引用になっていた。以下の通り、訂正する。

内甲本 「幼 驚駭 <small>（マ）</small> 日本紀」	↓	「幼 驚駭 <small>（マ）</small> 日本紀」
内丙本 「驚駭 <small>（マ）</small> 日本紀」	↓	「驚駭 <small>（マ）</small> 日本紀」

さらに、前稿 P 71 に記した次の点にも、若干の補訂が必要である。

折り目の跡らしき縦の線が、ほぼ等間隔（十四行分）に縦界と重なるように見られ、その上端部や下端部が三角形

状に破損している場合もある。もとは折本の形であったものが、いつの時点かに卷子本に改装されたのであろうか。

実際、今回翻刻した箇所のうち、第429・443行は

429 □□ひ給よ

443 □□あらはし給へるくやうせさせ給

と、その行頭が欠けている。それは、右引前稿波線部に記したように、各行頭部を含んだ上端が三角形状に破損しているからである。そして、これら第429行と第443行とに十四行差あるのは、これも右引部中実線部に記した通り折り目の跡らしい縦の線が十四行分のほぼ等間隔に見られることと、対応している。事実、それら各行の脇に縦界と重なるように折り目の跡らしい線が見られ、それぞれの上端部が破損しているのである。また、全巻最終行の直前、第455行も、

455 □□花の中のやとりにへたてなくおもほせとてうちなき給ぬ

と、行頭部が破損している。残存部分外なので確認はできないものの、これも、先の第443行の十四行あとの第457行の脇にやはり折り目の線があり、その上端部を中心に破損が広がっていて、それが及んだものかと思われよう。

このように、折り目の跡らしき縦線が十四行ごとにほぼ等間隔に現れていること、前稿に述べた通りのだが、今回さらに子細に見てみると、その各十四行分のちょうど中間にも、やはり縦界と重なるように縦の線の見られることが確認できた。結局、十四行分ごとでなくて、七分分ごとに縦線が見られる、ということになる。ただ、線の見え方が異なり、より鮮明な線とそうでない線が交互に現れていて、それで、前稿では十四行間隔に線が存するものと見誤ったよ

うである。

今右の通り補訂し得たことは、田坂憲二氏の御検討<sup>(1)</sup>を承けつつ、「十三世紀の最末期か、十四世紀初頭の書写と推定できる」など<sup>(2)</sup>とされる伝伊行筆『紫明抄』竹河卷断簡と京女大本とが「元来一まとまりのものであったことは、最早断言していいものと考えられる」と前稿に述べたことと、連関することにもなる。これも前稿では不充分にしか把握できていなかったことなのだが、同断簡にも、縦界と重なるような形で折り目の跡らしき縦線が七行ごとに、しかも、やはり鮮明な線とそうではない線が交互に、見られる。恐らくそうした状況に基づいてのことなのだろう、同断簡について久曾神氏は「もとは一面七行の折本であったようである」と記されている<sup>(3)</sup>。このことは、右に補訂し確認できた京女大本のあり方とまさに符合するものであるに違いない。同断簡と一まとまりのものであったことについて、「最早断言していいものと考えられる」と前稿に述べたが、さらに、完全に断言し得ることになった、と言ってよからう。とすれば、一面七行の折本仕立てになって一連のものについて、竹河卷断簡は伊行筆と伝え、京女大本は為世筆と伝えられていることになる。

なお、京都女子大学図書館蔵本すなわち京女大本が、全巻に亘って京大本と親近性を有すること、前稿にて確認しておいたが、今回翻刻を掲げた箇所についても、京大本との相違は確かに、漢字と仮名の違いや訓点・傍記の違いのほか(後掲校異にはそれら相違も含めて示している)、

- |              |                  |                 |              |                           |                      |
|--------------|------------------|-----------------|--------------|---------------------------|----------------------|
| 217 弥益女―弥益女也 | 257 もて王とす―王とす    | 261 各―吾         | 269 物―物と     | 276 つみける―つきける             | 290 けちえんに―け          |
| ちえん          | 295 もえきかけ―もえきのかけ | 296 幼 驚駭―驚駭     | 327 たつこと―たつを | 351 右大臣―右大将 <sup>臣兼</sup> | 388 穆―初 <sup>同</sup> |
| 393 鐘―鍾      | 403 なかめて―なかめつ、   | 420 ひとりうち―ひとりこち | 427 しるへき―しるき |                           |                      |

といった、かなり微細な相違十五箇所ほどに限られている（行番号と共に京女大本の本文を掲げ、棒線を引いた、その下に京大本の対応本文を示した）。

- (1) 『源氏物語享受史論考』（風間書房、平21）第四章の「一〇『紫明抄』の古筆資料について」。
- (2) 小松茂美氏『古筆学大成』第二十四巻（講談社、平5）。
- (3) 『仮名古筆の内容的研究』（ひたく書房、昭55）。

本稿は、前稿と同様、京都女子大学大学院文学研究科国文学専攻博士前期課程の平成二十三年度授業「中世文学演習Ⅰ」同二十四年度授業「中世文学演習Ⅱ」において、担当者の中前と受講生の柴田とが協同で検討した結果に基づく。以下の翻刻本文は柴田が作成して中前が確認、右の解題補訂は中前が作成して柴田が確認、後掲の校異は適宜分担しつつ二人で作成したものである。御高配を賜った所蔵者・京都女子大学図書館の関係各位に、深謝申し上げます。

《京都女子大学図書館所蔵『紫明抄』残巻 翻刻》（第203行～第456行）

翻刻の要領は前稿に示した通り。

又云愛利俱行衆乃悦

そのころの右大将やまひしてし、給 ひけし申給

205 辞し給也

卑下する也

ところ／＼のきやう とんしきなど

所々饗

屯食

このおとゝそいまさかりのしうとくとくとはみえ給

宿徳

いとになし

\*209「いとになし」朱の「

」で括られている 「と」は別字を書いた上から重書き

210 かわうおん

いとになし

賀王恩

最無二

よしめきそしてふるまふ ひそみゐたり

存して也

頻ヒシム

\*212「ひそみ」別字を書いた上から「ひ」と重書き

やよひの十よ日のほとにたいらかにむまれ給ぬ

215 東宮誕生事

御母明石中宮

六条院御女  
母明石上

入道前播磨守女也

例

醍醐天皇誕生事

御母皇太后宮胤子

内大臣高藤公女  
母交野大額彌登女

まことのおは君

かたほならば

ろくのきぬ

祖母也

頑

禄

\*219「禄」「示」偏が「衣」偏に書かれている

220 うつくしみ

おほとかなる物

うけはらぬなどを

愛

穩オホトカナリ

不諾

すみの山を

みはへしにも

須弥山也 見侍し也

ないけう内教の心をたつぬる中にも夢をしんす信へき事おほく侍し

昔訖栗キリ枳キワウ王といふ人迦葉カエの父也ありき十の夢を見て

迦葉カエに問たてまつり給へり仏の、給はくこれみな当

来尺迦遺法の弟子の先兆を表する也と云々

第一夢云一の大象室内に閉られてさらに門戸なし

但ちひさき窓あり其象方便して身をなけていつる事を

えたれとも尾猶まるとにさえられていつる事あたはず

これは尺迦遺法弟子等父母妻子をすて、出家発

心して仏道におもむくといへとも猶名利をいたく事

（以上、第8紙）

尾のまるとにさえらるゝかことくなるを表す

第二夢云ひとりの渴人ありて水をもとむるに即一の井

あり其水八功德水也井は渴人にしたかへともこれをのます

これは遺法弟子諸道俗等あへて法をうけずして知法

の物あれともしかもかれにしたかひて学せざる事を表す

第三夢云人ありて一叔の真珠をもちて一叔の妻

の粉こにかふとみる

\* 225 振り仮名は朱書き

\* 238 「麦」 「表」<sup>②</sup>と書いた上から「麦」と重書き

240

これは遺法の弟子利を求かたために仏の正法をもちてへつらひて人のためにとく事を表す

第四夢云人ありて梅檀をもて凡木にかふとみる

これは遺法弟子内の正法をもて外の書典にかふる事を表す

第五夢云妙園林の花果しけくさかなるあり狂

賊これをやふりうしなふとみる

245

これは遺法弟子ひろく如来の正法の園を滅せん事を表す

第六夢云諸小象ありて一の大象をかりて象の中を

いたさしむとみる

250

これは遺法弟子もろくのあしきともから破戒の衆僧

ありて有徳の人を擯出する事を表す

第七夢云一の獼猴ありて身きたなき物をぬりて

をのれか衆の湯あむる所にいたりて其船におりぬ衆

皆不浄なる事を知て悉にけさりぬとみる

これは遺法弟子諸悪事をもて良善にくはへてけか

すにみる物みなどをくさる事を表す

255

第八夢云一の獼猴まことに徳ある事なけれども衆も

ろともに海水をとりて頂にそゝきてもて王とすと見る

\* 252「おりぬ」「て」と書いた上から「ぬ」と重書き

260

これは遺法弟子もろくのあしきともから破戒の僧を  
あけて衆の和上とせん事を表す

第九夢云一の衣ありかたくして又ひろし十八人の輩あり  
て各少分をとりて四面にあらそひ、くに衣猶やふれすとみる

これは遺法弟子仏の正法をわかちて十八部となすに

すこしき異説はありといへともしかも真の法は猶存せ

りこれによりて修行するに皆解脱をうといふ事を表す

265

第十夢云おほくの人ありてともにあつまりてたかひにあ

ひ征伐して死にいたるとみる

これは遺法弟子十八部の内に各門人ありて部執不

同にして鬭諍をおこす事を表す

そのかへりまうし カヘリマウシ た、わか身はへんけの物おほしなして

賽 カヘリマウシ 復命 カヘリマウシ 変化

さほのほかのきしにいたりて カヘリマウシ たてあつめたるくわんふみ

婆娑 カヘリマウシ 願書

くまおほかみにもせし侍なん まかりまうし そふんし給

熊狼施 辞 処分也

\* 271「あつめ」別字を書いた上から「つ」と重書き

275

ほとけの御弟子のさかしきひしりたにわしのみねをはたとく  
 しからすたのみきこえなから猶たき、つみける夜のま  
 とひはふか、りけるを

生者必滅尺尊未免梅檀之煙樂尽哀來天人猶逢

五衰之日

280

このふみのことは さすかにかうにしみて

詞

香

なかのみさうしより この宮をらうしたてまつりて

御障子

領したてまつる也

とりのねきこえぬ山にとなん

285

とふとりのこゑもきこえぬおく山のふかき心を人はしらなん 古今

さらはそのゆいこんな、り いとあやしきほんしとかいふやうなる

遺言

梵字也

いうそくに せんそのおと、 あまりひた、けて

優息に

先祖大臣

叨

ムヒタ、ムサホク

けちえんに かくしもくし給へるありさまの

掲焉に

具し給へる也

ふくちのそのにたねまきて

\* 285

行尾「今」の下端が切断されている

百千劫菩提種八十二年功德林

295 このよにてほたいのたねをまきつれば君かひくへき身とそなりぬる  
いはけたる けうして わかきゑふつかさ もえきかけ

幼 驚駭日本記 興 衛府官 萌黄

いとみつ、 みはしのなかのしな

挑 御階中階 みはしの第二のはし  
ならんかし

さくらはよきてこそなどの給

300 ふくかせも心しあらはこの春はさくらをよきてちらさゝらなん

春のたむけのぬさふくろにやとおほゆ

拾遺云ものへまかりける人のもとにぬさをむすひふく

ろにいれてつかはすとて よしのふ

あさからぬちきりむすへるこゝろは、たむけのかみそしるへかりける

305 つはいもちゐなしかうし

椿餅 梨子 柑子

花の木にめをつけてなかめやる

おきもせずねもせてよるをあかしては春の物とてなかめくらしつ 伊勢語

猶うちとのおほからす

\* 307 伊勢語

下端が切断され、「語」の  
一部のみ見えている

## 内外用意

みやまきにねくらさたむるはことりもいかてか花のいろにあくへき

果鳥万ハコ 只鳥カホ 容鳥カホ  
常陸国にはかきつはたをかほはなといふこの花  
さく時この鳥あり

あやなくけふはなかくらし侍る

みすもあらずみもせぬ人の恋しくはあやなくけふやなかくくらさん

ひきしのひてれいのかく

例の書といふ也

光源氏物語卷第二十 わかな下 若菜下

ことはりとおもへとうれたくも侍かな

あしひきの山たのそをつをのれさへわれをほしといふうれはしきこと如 古今 \*321 行尾〔今〕の下端が切断されている

なぞかくことなる事なきあへしらひはかりをなくさめにて

はいかゝすくさん

ことならはおもはずとやはいひはてぬなそ世中のたまたすきなる 古今

\*324 行尾〔今〕の下端が切断されている

殿上のゝりゆみ

賭弓 賭射とも 射的とも 三月尽にをこなはる

花のかけいと、たつことやすからて

けふのみと春をおもはぬ時たにもたつことやすき花のかけかは  
やなきのはをも、たひいあてつへきとねりともものうけはりていと

古今  
類

330

むむしんなりやすこしこ、しきてつきともをこそいませめ  
とて大将たちよりはしめてくたし給

楚有<sup>ニ</sup>養由基<sup>ヤウユウキトイフ</sup>者<sup>セム</sup>善射<sup>シヤ</sup>者也去<sup>ニシテ</sup>柳葉<sup>ニシテ</sup>一百步<sup>モハダヒハサ</sup>而射百<sup>モハダヒハサ</sup>發而

百中<sup>ヒヤダル</sup>左右<sup>ニミルモノ</sup>觀者<sup>イフ</sup>数千人皆曰<sup>ト</sup>善射<sup>ト</sup>史記周本記

われさへおもひつきぬる心ちす ろんなうかよひ給

335

付思也

論無

けいし給へは あのこと ゑしきこえ給

啓 如案 怨

世中のつねなきによりかしこきみかとの君も位をさり給ぬる

にとしふかき身のかうふりをかけんなにかはおしからんとおほし

\* 339「んと」別字を書いた上から」とと重書き

340

の給

掛冠

東觀漢記曰王莽居椅子宇諫莽而莽誅之逢萌謂

其友人曰三綱絶矣不去禍將及人解冠掛東門而去

蒙求逢萌掛冠

後漢逢萌字子康北海人掛冠避世牆東

懸車

古文孝經曰七十老致仕懸其所仕之車置諸廟永使子

孫監而則正而立身之終其要然也漢薩広徳為御

史大夫凡十月免婦沛太守迎之界上沛以為榮懸其

安車伝子孫

師古曰懸其所賜安車以榮  
榮致仕懸車亦古説也

將軍左大将右大臣になり給てそ世中のまつりことつかうまつり給ける

粟田関白 道兼公 右大臣撰録事

目  
めをさへのこひた、して 御いきほひ さえくしく はふかせ給

囁 タ、ス

徳 イキホヒ 才

省ハフク

へいしう ひとたまひ 人のみありさま

陪従

人給 出車之名也

御ありさま也

\* 355「へいしう」

別字を書いた上から「しう」と重書き

十月なかの十日なれば神のいかきにはふくすもいろかはりて

ちはやふる神のいかきにはふくすも秋にはあへすもみちしにけり

をとにのみ秋をきかぬかほなり

もみちせぬときはの山にふくかせのをとにや秋をき、わたるらん

こまもろこしのかくよりもあつまあそひのみ、なれたる もとめこ

高麗 唐 楽

求子

かみよをへたる松にことゝふ みかとよりのものみおさゝし給はず

神代也 門外見物也

365 たかむらの朝臣のひらの山さへといひける雪のあしたをおほしやれば

浪起桑田行変海花開用令不依春 封雪琴 野相公

ことをまねひとらんとまとひてたにしうるはかたくなんあ

りけるけにはたあきらかにそらの月ほしをうこかし時な

らぬ霜雪をふらせくもいかつちをさはかしたるためし

あかりたるよにはありけり

弾琴有得失事

礼記云楽者天地之和

漢書礼楽志云象天地而制礼楽所以通神明立人倫 師古曰倫理也

礼記云移風易俗天下皆寧 言樂用即正人理和陰陽

漢書礼楽志云孔子曰安上治民莫善於礼移風易俗莫

善於樂

師古曰此孝經載孔子之言也 謹古善字

至人樞思制為雅琴 文選琴賦

（以上、第13紙）

能<sup>ツシス</sup>尽<sup>ニ</sup>雅<sup>ヲ</sup>琴<sup>一</sup>唯<sup>ヒト</sup>至<sup>ル</sup>人<sup>ノ</sup>兮<sup>ト</sup> 同

380

五音得失事

文選嘯賦注云發徵則隆冬灑蒸騁羽則嚴霜夏凋

動商則秋霖春降奏角則谷風鳴條

翰曰熙美也徵夏音也故冬發此声感炎蒸至羽冬音

也夏騁此声感嚴霜至商秋音也春動此声則秋霖降

385

角春音也秋奏此声感温風鳴條也谷風則春風也皆音

律至妙感応有如此者善曰列子曰鄭師文学琴於師襄

師襄曰子之琴何如師文曰請嘗試之於是当春而叩商絃

以召南呂涼風穆至草木成実及秋而叩角絃以敷哭鐘

温風徐廻草木發榮当夏而叩羽絃以召黄鐘霜雪交下

390

川池暴冷及冬而叩徵絃以激蕤賓陽光熾烈堅水立

散師襄曰雖師曠之清角鄒衍之吹律無以加之張湛曰

商金音属秋南呂八月律角木音属春夾鍾二月律羽

水音属冬黄鐘十一月律徵火音属夏蕤賓五月律鄭

玄礼記注曰喜蒸也声類曰喜熙字也

395

おにかみのみ、と、めかたふきそめにける物なれはにやなまく

にまねひて思かなはぬたくひありけるのちこれをひく

はよしなしといひて琴のを、たちて其後ひかさりし  
事をよめる也

400 むかしの御わらはあそひのなこりをたに思いて給はず  
おもふとはつみしらせてきみ、なくさわらはあそひのてたはふれより

よのうきつまにといふやうに

あさちふ<sup>の</sup>。をさ、かはらにをく露そよのうきつまと思ひたる、  
かきりたにあるとうちなかめて

405 恋しさのかきりたにあるよなりせはつらきをしめてなげかさらまし  
き、わくはかりならさせ給へ

ことのねをき、わく人のあるなへにいまそたちいて、を、もすくへき  
しかつたはるなかのをはことにこそは侍らめ

和琴第二絃

410 月さしいて、くもりなきそらにはねうちかはすかりかねもつら  
をはなれぬうらやましくき、給らんかし

しら雲にはねうちかはしとふかりのかすさへみゆる秋の夜の月  
かせはたさむく物あはれなるに

はたさむく風はよことにふきまざるわか思いもはをとつれもせず

\*402「あさちふ<sup>の</sup>」「<sup>の</sup>」「<sup>の</sup>」は別筆



卿の宮も二宮とてうちつれてあそひ給所を夕霧の大

將のとをり給にわかれたかれんとたかひにあらそひ給を源

氏の院御らんしとかめて仰られたる御詞也近衛つかさをはちか

きまもりといふゆへなり

わかめのうちつけなるにやあらん ことなのりいてくる人たになき事

目

子

かのゆめは思あはせてなんきこゆへきよるかたらすとり女のつたへにいう也

孫真人云夜夢不須説

\* 437「り」<sup>か</sup> 別筆にて「か」と訂正

440

光源氏物語す、むし 鈴虫 横笛並

夏ころ。<sup>は</sup>すちすの花のさかりに入道のひめ宮の御持仏と

□あらはし給へるくやうせさせ給

供養也

\* 442「。」<sup>は</sup>「。」<sup>は</sup>は別筆  
\* 443 上端部が欠損している

445

御ねんすたうのくとも はたのさま めそめもなつかしう

念誦堂具也

幡

目染

からの百歩のえかう かえうのほう みやうかう みちをかくしほ、ろけて

百歩衣香 薫物也

荷葉方

名香

密<sup>ッ</sup>と、めて合たる也

\* 448「荷葉方」

「也」と書いた上から「方」と重書き

けかけたるかね

ちんのけそく

仏の御をなしちやうたいのうへ

450 計金

沈花足

頂戴

たうかさりはて、

かうしまうのほり

きやうかうの人くまいりつとひ給

堂 飴

講師

行香

かうせち

講説

455

□□花の中のやとりへたてなくおもほせとてうちなき給ぬ

一々池中花尽満花々惣是往生人各留半座乗花

\* 455「おもほせ」

別字を書いた上から「ほ」と重書き

\* 455

上端部が欠損している

(以上、第16紙)

《京都女子大学図書館所蔵『紫明抄』残巻 校異》(第203行〜第456行)

校異の要領は前稿に示した通り。

203 愛利<sup>レ</sup>愛<sup>リ</sup>利(京)

204 その<sup>レ</sup>かの(内丙) し、しし(内甲) ひけし申給<sup>ナシ</sup>

(内丙)

205 卑下する也<sup>ナシ</sup>(内丙)

- 206 とこゝやうーナシ（内丙） とんくなどーナシ（内丙）
- 207 所々饗ーナシ（内丙） 屯食ーナシ（内丙）
- 208 このゝえ給ーナシ（内丙） みえー見え（京）
- 209 宿徳ーナシ（内丙） いとになしーナシ（京・内甲・内丙）
- 210 かわうおんーかわうをん（内甲・内丙）
- 211 賀王恩ー賀王恩也（内丙） 最無二ー最無二也（内丙）
- 212 よしーまふーナシ（内丙） ひそくたりーナシ（内丙）
- 213 存して也ーナシ（内丙） 類ヒノムー嘸ヒノム（京） ナシ（内丙）
- 214 十日ー十日（内丙） ほとー程（内甲） 給ぬー給（内丙）
- 215 入道ー女也ー入道ノメ女也メノメ※「母明石上」の左（内甲） 女也ー女也メノメ（内丙）
- 217 皇太后宮ー皇太后宮（京・内甲） 胤子内大臣高藤公女  
母安野大領弥益女 胤子内大臣高藤公女  
母安野大領弥益女
- 218 胤子ハ内大臣高藤公女母ハ交野大領弥益女也（内丙）
- 219 ろくのきぬーナシ（内丙）
- 220 祖母也ー祖母君也（内丙） 頑ー頑也（内丙） 祿ーナシ（内丙）
- 221 うつくしみーナシ（内丙） 物もの（内丙） うけはらぬーはぬ（内甲） などをーナシ（内丙）
- 222 愛ーナシ（内丙） 穩オホトカリー穩ワカモ（内丙） 不諾ーナシ（内丙）
- 223 すみの山をーナシ（内丙） みはへしー見はへし（京・内甲）
- 223 みはくにもーナシ（内丙）
- 223 須弥山也ーナシ（内丙） 見侍し也ーナシ（内丙）
- 224 ないけう内ーないけう（内丙） 中にもー中にも（内丙） しん新
- 225 すーしんす（内丙） おほく侍しーおほく侍し（内甲） おほく侍し 内教也 信也（内丙）
- 226 訖栗キリ王ワウー訖栗キリ王ワウ（京） 訖栗キリ王ワウ（内甲） 訖栗キリ王ワウ（内丙）
- 227 人迦葉キ仏の父也ー人迦葉キ仏の父也（内甲） 人父迦葉迦葉キ（内丙） 見て
- 228 一みて（内甲） 見（内丙）
- 229 たてまつりー奉り（内丙） 給へりー一りキ（内甲） 仏の、給
- 230 はくー仏の給はく（京） 仏のたまはく（内丙）
- 231 尺迦ー釈迦（内丙） 也ーなり（内丙）
- 232 さらにー更（内丙）
- 233 ちひさきーちひさき（内丙） いつるー出る（内甲・内丙） 事
- 234 一こと（内丙）
- 235 猶ナなを（内丙） まとー窓（内丙） さえられてーさえられて（内甲・内丙）
- 236 これー是（内甲・内丙） 発ー沙弥（内丙）
- 237 さえらる、ーさえらる、（内丙） 表すーへうす（内丙）
- 238 したかへともーしたかへ共（内丙） これー是（内丙）
- 239 これー是（内丙）
- 240 あれともーあれ共（内甲） かれにー彼（内丙） したかひてー
- 241 随て（内丙）
- 242 一叔の真珠ー一叔真珠（内丙） もちてー持て（内丙） 一叔の
- 243 表ー一叔表（内甲）
- 244 粉粉（内甲・内丙） かふーかふる（内甲） みるー見る

- 240 (京・内甲) 見ゆ (内丙)  
 これ―是 (内甲・内丙) 遺法の弟子―遺法弟子 (内丙) 求か  
 ため―求めるかため (内丙)
- 241 へつらひて―へつらひて (内丙) 事―こと (内丙)
- 242 第四夢云―第四には夢云 (内丙) 凡木―つま木 (内丙) みる  
 ―見る (京) 見せ (内丙)
- 243 これ―是 (内丙) 正法―一法 (内丙) 表す―へうす (内丙)  
 しけく―しけて (内丙) あり―也 (内丙)
- 244 賊―夫 (内甲) やふり―破 (内丙) みる―見る (京) 見ゆ  
 (内丙)
- 245 これ―是 (内丙) 園―園 (内丙) 事―こと (内丙)
- 246 諸小象―諸象 (内丙) ありて―しりて (内丙)
- 247 いたさしむ―出さしむる (内丙) みる―見る (京・内丙)
- 248 これ―是 (内丙) 遺法弟子―遺法の弟子 (内甲) もろく―  
 諸 (内丙) あしき―悪 (内丙)
- 249 事―こと (内丙)
- 250 きたなき―きたな (内丙)
- 251 湯あむる―湯あつむる (内甲) 船―ふね (内丙)
- 252 事―こと (内丙) 知て―しりて (内丙) 悉―ことくく (内  
 甲・内丙) みる―見る (京)
- 253 これ―是 (内甲・内丙)
- 254 みる物―見る物 (京・内甲) くるもの (内丙) みな―皆 (内  
 丙) とをく―遠く (内丙) さる事―去こと (内丙)
- 255 一の獼猴―獼猴 (内丙)
- 256 もて王とす―王とす (京) もてわす (内甲) もて王とする (内  
 丙) 見る―みる (内丙)
- 257 これ―是 (内甲・内丙)
- 258 事―こと (内丙)
- 259 十八人の輩―十八人輩 (内丙)
- 260 各―吾 (京) あらそひ、く―あらそひひく (内甲) あらそひ  
 引 (内丙) 猶―なを (内丙) みる―見る (京・内丙)
- 261 これ―是 (内丙) 遺法弟子―遺法の弟子 (内甲) 仏の正法―  
 仏法の正法 (内甲) 十八部と―十八部を (内甲)
- 262 あり―ある (内甲)
- 263 これ―是 (内丙) 皆―みな (内丙) うといふ―うる (内丙)
- 264 みる―見る (京) 征伐―征代 (内甲)
- 265 これ―是 (内丙) 各門人―門人 (内丙)
- 266 事―こと (内丙)
- 267 物―物と (京・内甲) た、くして―ナシ (内丙)
- 268 復命―復命 (同上) 変化―ナシ (内丙)
- 269 復命―復命 (同上) 変化―ナシ (内丙)
- 270 くわんふみ―くはんふみ (内甲) たてゝふみ―ナシ (内丙)
- 271 娑婆―娑婆外岸也 (内丙) 願書―ナシ (内丙)
- 272 まかりまうし―まちまうし (内甲) ナシ (内丙) そふんし給  
 ―ナシ (内丙)
- 273 辞―ナシ (内丙) 処分也―ナシ (内丙)
- 274 ほとけの―ほとけ (内甲) 仏の (内丙) 弟子―てし (内甲)
- 275

- 294 293 292 291 290 289 288 287 286 285 284 283 282 281 280 278 276
- みねをは—みねを（内甲） たとく—ことく（内丙）  
 きこえ—きこへ（内丙） つみける—つきける（京・内甲・内丙）  
 丙） まとひ—まもひ（内甲）  
 尺尊—釈尊（内丙）
- この—とは—ナシ（内丙） さすくみて—ナシ（内丙）  
 詞—ナシ（内丙） 香—ナシ（内丙）  
 なかりより—ナシ（内丙） 宮を—宮（内丙）  
 御障子—ナシ（内丙） 領してまつる也—奉領也（内丙）  
 ね—音（内丙） なん—なむ（内丙）  
 とふとり—古とふ鳥（内丙） おく山—おく山<sup>奥</sup>（内甲） 心—  
 こ、ろ（内甲） なん—なむ（内甲） 古—ナシ（内丙）  
 さらくな、り—ナシ（内丙） いとくなる—ナシ（内丙） ほん  
 し—ほむし（内甲）  
 遺言—ナシ（内丙） 梵字也—梵字（内甲） ナシ（内丙）  
 いうそくに—ナシ（内丙） あまり—あまりに（内丙）  
 優息に—ナシ（内丙） 大臣—大臣也（内丙） ヒタケ—ヒタケ  
 丙）
- けちえんに—けちえん（京） かくくまの—ナシ（内丙）  
 掲焉に—掲焉也（内丙） 具しける也—ナシ（内丙）  
 ふくち—ふくち<sup>福</sup>（京） ふく地（内丙） まきて—まきて 福地也  
 丙）  
 百千劫—百千万劫（京・内甲・内丙）  
 よ—世（内丙） たねをまき—たつねまき<sup>ね</sup>（京） 種をまき（内
- 308 307 306 305 304 303 302 301 300 299 298 297 296 295
- 丙） なりぬる—成ぬる（内丙）  
 けうして—ナシ（内丙） わかき—わかき<sup>馬</sup>（内甲） つかさ—つ  
 かき（内丙） もえきかけ—もえきのかけ（京・内甲） ナシ  
 丙）  
 幼驚駭<sup>日本記</sup>—驚駭<sup>日本記</sup>（京） 幼驚駭<sup>日本記</sup>（内甲） 驚駭<sup>日本記</sup>（内  
 丙） 興—ナシ（内丙） 衛府官—衛府官也（内丙） 萌黄—ナ  
 シ（内丙）  
 いとみつ、—ナシ（内丙）  
 挑—ナシ（内丙） 御階中階—御階<sup>階</sup>中階（内甲） 御階中階也  
 丙）  
 さくらは—さくらを（内丙）  
 ふくかせ—吹風（内丙） さくら—桜（内丙） なん—なむ（内  
 甲）  
 たむけ—手向（内丙）  
 拾遺云—拾遺ニ云（内丙）  
 入れて—入て（内丙） よしのふ—能宣（内丙）  
 ちきり—契（内丙） こ、ろは、—こ、ろはへ（内甲） 心は、  
 丙） かみそ—神と（内丙）  
 もちる—もちい（内丙）  
 梨子—梨（内丙） 柑子—ナシ（内丙）  
 花—はな（内丙）  
 よる—夜（内丙） なかめ—詠（内丙） 伊勢語—伊勢語（京）  
 伊勢物語（内甲） ナシ（内丙）

- 309 おほからすーおほしからす (内丙)
- 310 用意ー用意也 (内丙)
- 311 みやまきーみやま木 (内甲・内丙) さたむるーあらそふ (内丙)
- 312 丙 はことりもーはこ鳥の (内丙) いろー色 (内甲・内丙)  
果鳥(ハコトリ)ー果鳥 (内甲) 果鳥 (内丙) 容鳥(カホ)ー容鳥 (内丙) 常陸国(トコ)ーひたちの国 (内丙) かほはなーかほ花 (内丙) いふー云 (内丙)  
この花(ハナ)ー此花 (内甲) 此花 (内丙) この鳥(トリ)ー此鳥 (内甲) 此鳥 (内丙) ありーありと云々 (内丙)
- 313 あやく待るーナシ (内丙)
- 314 みすー見す (京) みすくさんーナシ (内丙) みもせぬー見もせぬ (京・内甲) くらさんーくらさむ (内甲)
- 316 書といふ也ー書といふなり (内甲) 書也 (内丙)
- 319 わかな下(ワカナ) 若菜下(ワカナ) 若菜下 (京) わかな下(ワカナ) 若菜下 (内甲) 若菜下 (内丙)
- 320 おもへとー思へと (内甲) 思へとも (内丙)
- 321 あしひきー古あし引 (内丙) 山たー山田 (内丙) そをつーそほつ (内甲) そらつ (内丙) われー我 (内丙) ほしーほ (内丙) ことーこと (内丙) 古今(コノイマ)ーナシ (内丙)
- 322 なそかくーなそや (内甲) なそやかく (内丙)
- 323 すくさんーすくさむ (内甲) すくらむ (内丙)
- 324 ことーこと (内丙) おもはずー思はず (内丙) いひはてぬーいひ出ぬ (内丙) 世中ー世の中 (内甲・内丙) 古今(コノイマ)ーナシ (内丙)

- 325 殿上の、りゆみー殿上ののりゆみ (内丙)
- 326 三月尽にー三月尽 (内甲) 射的(シヤク)はるーナシ (内丙)
- 327 たつことーたつを (京)
- 328 けふー今日 (内甲) おもはぬー思はぬ (内丙) 観今(カミイマ)ーナシ (内丙)
- 329 やなきのはーやなきの葉 (内甲) うけはりてーうけはりて (京・内甲) いとむーいとむ (京・内甲) やなくいとーナシ (内丙)
- 330 むしんーむしん(ムシ) (京・内甲) こ、こ、(コ) (京) いまーいとま (内丙)
- 331 たちーたち(タチ) (京・内甲) くだし給ーくだし (内甲) とてし給ーナシ (内丙)
- 332 養由基者(ヤウユキノシヤ)ー養由基者 (内甲) 善射者(ゼンシヤ)ー善射者 (京) 善射者 (内甲) 発(ハツ)ー発(ハツ) (内甲) 楚有(ソウ)射而(シヤ)ーナシ (内丙) 百(ヒヤク)ー百(ヒヤク) (内甲) 左右(サウ)ー左右 (内甲) 日(ヒツ)ー日(ヒツ) (内甲) 百中(ヒヤクチュウ)
- 333 本記(ホンキ)ーナシ (内丙)
- 334 論無(ロヌ)ー論無(ロヌ) 或無論(ワカニ) (内甲) 無論也 (内丙)
- 335 あのことーナシ (内丙) ぬし(ヌシ)くえ給ーナシ (内丙)
- 336 啓(キ)ー啓給也 (内丙) 如案(ニヨ)ーナシ (内丙) 怨(ウラミ)ーナシ (内丙)
- 337 世中(セチュウ) 350(ノ) 説也(セツ)ーナシ (内丙)
- 338 かけんーかけむ (内甲)
- 339 莽(マウ)ー莽 (内甲)
- 340 将(シヤウ)時(ジ) (京) (内甲) 冠(カウ)ーナシ (内甲)

- 364 363 362 361 360 359 358 357 356 355 354 353 351 346 345
- 後漢逢萌―後漢書萌（内甲） 東―東米成（内甲）  
 懸―縣（内甲）  
 左大将―左大将（内丙） 右大臣―右大将臣（京） つかうまつり  
 つかふまつり（内丙） 給ける―給へる（内甲） 給ふける髯  
 黒也（内丙）  
 め―め（内丙） た、して―た、して 目也（内丙） 御いゝせ  
 給―ナシ（内丙）  
 嘲―嘲也（内丙） タ、ス―タ、ム（内甲） 徳イフ―ナシ（内丙）  
 省ハラケ―省（京）  
 人のゝさま―ナシ（内丙）  
 陪従―陪祝（内甲） 陪従也（内丙） 人給―人給也（内丙）  
車之名―出車名（内丙） 御あゝま也―ナシ（内丙） 也―なり（内  
 甲）  
 いろかはりて―色かはり（内丙）  
 ちはやふる―古色つきはやふる（内丙） もみち―紅葉（内甲・内  
 丙） しにけり―しけり（内丙）  
 のみ―も（内丙）  
 もみち―紅葉（内丙） ふくかせのをと―吹風の音（内丙）  
 かくよりも―かくよりし（内甲） かくまりも（内丙） あつゝ  
 たる―ナシ（内丙） なれたる―なれる（内甲）  
 楽―楽也（内丙）  
 松にゝはす―ナシ（内丙）  
 門外見物也―ナシ（内丙）
- 384 383 382 381 379 378 377 375 374 373 372 370 369 368 367 366 365
- たかむら―たかむら（内丙） 朝臣の―朝臣（内甲） あそんの  
草（内丙） あしたを―あした（内丙）  
 桑田行―桑白汗田行（京） 桑日行（内丙） 海―雪海（京） 用令―冬界  
 （京） 月令（内甲） 春―琴春（京） 封禁琴―ナシ（内丙）  
 ことを―ことを（京・内甲） ナシ（内丙） とらん―と、む  
 （内丙） しうる―しる（内丙） なん―なむ（内丙）  
 はた―はた（京・内甲・内丙） そら―空（内甲） うこかし―  
動うこかし（京・内甲） 時―とき（内丙）  
 くもいかつちを―くもいかつちを（京・内甲） 雲雷をつちを  
 （内丙） さはかし―いかしさはかし（内甲）  
 あかり―めかり（内甲） あかゝけり―ナシ（内丙）  
 云―日（内丙） 之―ナシ（内丙）  
 立―意立（内甲）  
 皆―ナシ（内丙）  
 治―沉（内甲） 莫―草（内甲） 真（内丙） 謙―羔論（内丙）  
 莫謙於樂―草謙於樂（内甲） 莫羔論於樂（内丙）  
 謙古善字―羔（内丙）  
文選琴賦―ナシ（内丙）  
 能尽フラス三雅琴―ナシ（内丙） 唯―唯ヒト（内丙） 兮―兮イノリ（内丙）  
 注―註（内甲）  
 霖―霜（内甲）  
 翰日393―月律―ナシ（内丙）  
 則秋霖―則秋。霖（京）

- 387 師襄—々々(内甲) 如—女(内甲)  
 388 召—呂(内甲) 南呂—ナシ(京) 涼—ナシ(内甲) 穆—初  
同(京)  
 389 召—呂(内甲) 鐘—鐘鐘(京)  
 390 立—立立(内甲)  
 391 師曠—師曠シクワ(京)  
 392 商—高(内甲) 鍾—鐘(内甲)  
 393 鐘—鍾(京)  
 394 喜—寿喜(内丙) 熙—悲(内甲)  
 395 おにかみ—おにかみ鬼神(京) おにかみ鬼(内甲)  
 396 思—思ひ(内丙)  
 397 よしなし—はしなし(内丙) を、—緒を(内丙) たちて—断  
て(内丙) 其後—その、ち(内丙)  
 398 事—こと(内甲) 也—なり(内甲)  
 399 思—思ひ(内丙) いて—いひ(内甲)  
 400 おもふとは—おもふには(内甲) てき—てし(内丙) み、な  
 くさ—みかなくさ(内甲) てたはふれ—てた。はふれ(京)  
 401 つまに—つま(内甲)  
 402 あさちふの—あさちふの(京・内甲・内丙) かはら—か原  
(内丙) よ—世(内丙) 思—思ひ(内丙)  
 403 なかめて—なかめつ、(京)  
 404 よ—世(内甲・内丙)  
 406 を、も—をも(内丙)
- 407 しか—し(内丙) つたはる—いたはる(内甲)  
 409 そら—空(内丙) かりかね—かり金(内丙)  
 410 給らん—給はん(内丙)  
 411 しら雲—しらくも(京) 白雲(内丙) かり—鴈(内丙) かす  
 一數(内丙) みゆる—見ゆる(京・内丙) 夜—よ(京)  
 412 かせ—風(内丙)  
 413 さむく—寒く(内丙) 風—かせ(京) ふきまさる—吹まさり  
(内丙) 思—思ふ(内丙)  
 415 想夫恋平調—想夫恋平調(内甲・内丙)  
 416 みる—見る(京・内丙)  
 417 ゆく—行(内丙) おもふぞ—思ふ(内丙)  
 418 せん—せむ(内丙) なん—なむ(内丙)  
 419 いと—糸(内丙) なに—何(内丙) たまのを—玉のを(内  
 甲) 玉の緒(内丙)  
 420 ひとりうち—ひとりこち(京) うたひて—ナシ(内丙)  
 421 山あら、きて—やまあら、きて(内甲) 山のあときて(内丙)  
 422 まさるかにやとくまさるかにや—まさるからやとくまさるかや  
(内甲) 催馬楽—催馬楽(内甲)  
 423 よ—夜(内丙) みる—見る(京) 物—もの(内甲)  
 424 思よ—思よ夜(京) 思ふよ(内甲) おもふ(内丙)  
 425 ふえたけ—ふえ竹(内丙) ふき—吹(内丙) かせ—風(内  
 甲・内丙) こと—こと如(内丙) す糸のよ—末の世(内丙)  
 427 おひ—おい(内甲・内丙) しるへき—しるき(京・内甲・内

- 442 441 438 437 435 433 432 431 430 429 428
- 丙 ふえたけ―ふえ竹（内甲） 笛竹（内丙） ものとは―もの  
 かは（内甲） 物とは（内丙）  
 すいしんに―すいしんよ（内甲） すいしんに（内丙） りやう  
 せん―りやうせつ（内甲）  
 □□ひ給よ―らそひ給よ（京） らそひ給（内甲） らそひ給よ  
 近衛 隨身 領（内丙）  
 440 匂兵部卿の宮―薰大将またわか君にをわせしと匂兵部卿宮も  
 （内丙） またり、時―三宮とていとけなくおはしまし、か（内  
 丙） 申、―申（内甲） あに―あそひ（内甲）  
 430 御あゝ式部―ナシ（内丙）  
 431 卿のゝ所を―ナシ（内丙） 二宮―二の宮（京） 夕霧の―夕霧  
 （内丙）  
 432 とをり―とほり（内甲） とおり（内丙） たかひに―ナシ（内  
 丙）  
 433 氏の―氏（内丙） 御らん―御覧（京・内丙） 仰られ―おほせ  
 られ（内丙） 也―いふなり（内丙）  
 435 いてくる―いてつる（内丙）  
 437 かのうも也―ナシ（内丙） なん―なむ（内甲） とり―とか  
 （京・内甲） いう―いふ（内甲）  
 441 孫真―須説―ナシ（内丙） 云―之（内甲）  
 441 す、むし 鈴虫 横笛並―す、むし 鈴虫 横笛並（内甲） 鈴虫（内  
 丙）  
 442 ころ。すちす―ころはちす（京） 衣はちす（内甲） こんはちす  
 は
- 443 □―も（京・内甲・内丙） あらはし―あらし（内丙）  
 444 念誦―御念誦（内甲・内丙） 具―具共（内丙）  
 447 百歩―ひやくふ（内丙） ほ、くけて―ナシ（内丙）  
 448 百歩―唐百歩（内丙） 密と―蜜と（京） 蜜をと（内甲・内丙）  
 て合―ナシ（内丙）  
 449 けかけたるかね―けかけこかね（内甲） 仏―ほとけ（内丙）  
 をなし―おなし（内甲・内丙）  
 450 頂戴―頂戴（内甲）  
 451 人―人々（内甲） まいゝひ給―ナシ（内丙）  
 452 堂 飴―堂飴 或云 けかけたるかね（内甲） 堂飴終（内丙） 行  
 香―行香人（内丙）  
 455 □□―かの（京・内甲・内丙）